

3. 運動障害

運動障害学生の困難とニーズは、障害の部位や程度によって多様であり、またニーズも異なる（『教職員のための障害学生修学支援ガイド』（日本学生支援機構）など参照）。ここでは筑波大学における支援体制の概要を紹介するのではなく、本校で経験した複数の支援事例を組み合わせるにより、ある運動障害学生に対する支援事例として記述することを試みた。ただし必要に応じ、体制の記述を含める。

（1）事例概要

A君（大学1年）は、脳性麻痺による運動障害のある学生である。何かに捕まって数歩の歩行はできるものの、通常は車いすにより移動する。キャンパスでは手動車いすと電動車いすを適宜使い分ける。上肢に不随意運動があり、時間はかかるが大きめの文字を書く。発語はやや聞き取りにくいものの、コミュニケーションに支障はない。食事、排泄、入浴、更衣、整容などは自分で行なうことができるが、介助があればより安全・円滑に行える。

（2）高校での学習ならびに支援状況

- 高校は関東地方にある一般高校の普通科。母親の自動車により通学。
- 当初は親による介助を検討したが、話し合いにより、同級生を中心とした支援体制を取る。教室間の移動は仲間が交代で介助。
- 階段のバリアは基本的に教室変更により対応するが、美術など一部授業については同級生の介助による昇降。
- 筆記具などの準備は周辺学生で対応。実験は他の学生が行なうのを観察しながらレポートを書く。
- 排泄は近くまで移動介助を利用し、その後は独力で行なう。ただ時間がかかるので、次第に自宅で排泄を済ませ、学校内では遠慮するようになる。
- 必要に応じて他の学生のノートをコピーし、自己学習により補う。試験は拡大した答案用紙を使う。

（3）入学前からの対応

（i）事前調査と設備・動線検討

- ① 入学手続き後に連絡を取り、A君の情報を得るとともに話し合いを始める。他の障害と同様、運動障害学生についても、入学以前からの調整が重要かつ有効な場合が多い。人的な支援体制だけでなく、施設設備の改修検討なども含まれるためである。推薦入試により入学までの期間に余裕があればやや緩和されるが、一般入試による入学者は極めて短い期間に以下の手続きを踏む必要がある。そのため、一部の対応は入学後に持ち越されることもある。A君には事前調査に電話での基本事項を収集するとともに、障害学生支援室で開発しているアセスメントシートを用いることによって、総合的に把握を行なった（本報告書の筑波大学報告部分を参照）。
- ② 聞き取りだけでなく実地の検討が必要なため、A君には大学に来校してもらい顔合わせを行なうとともに、大学構内を点検した。想定される主な動線上のバリアのうちドアの段差など改修できるものをピックアップしたが、一部の建物間移動が大回りになることがわかった。これは即時対応できないため、年次課題として記録した。

③また A 君は大学の学生宿舎を利用希望だったので、入居予定となった宿舎へも自分で移動を体験しつつ、室内確認を行なった。必ずしも希望通りの部屋に入居できるわけではないが、事前の検討と調整の結果、A 君は今年度卒業する 4 年生の使っていた部屋（世帯用）を引き継ぐこととなった。世帯用の部屋は 1 人用よりも広く、台所、浴室、トイレが部屋に附属している。確認した結果、バスタブ利用が困難なため、埋め込み式に替えることとなった。ただし大規模工事なので、夏休みを待って工事することにした。

(ii) 事前打ち合わせ会と授業等の調整

①入学式を控えた 4 月当初に学生宿舎への入居を済ませ、A 君と受入学類では打ち合わせ会を設けた。参加者は、本人とその家族、入学する学群・学類の長と担任、事務職員に加え、障害学生支援室職員、学生の支援スタッフ、そして共通授業（体育、外国語、情報処理）の担当教職員などである。ここで、直近の課題として入学前後の対応を整理するだけでなく、入学後の学習活動に必要な事項を協議する。すなわち、一般の授業における支援体制、共通授業における支援体制、移動ほか生活場面での配慮、などである。

②共通授業のうち、体育はオリエンテーションの結果「トリム運動」を選択した。これは障害者体育を専攻する体育教員が開設する授業で、様々な運動を組み合わせ、障害があっても取り組めるようプログラムされている。外国語では、英会話授業のブース利用が問題となったが、車いすからブースに移乗して受講することになった。情報処理授業では、パソコンのマウスをポインティングデバイスに変更するとともに、キーボードカバーを取り付けた。

③筑波大学はキャンパスが広いため、これらの共通授業は A 君が通常学習するエリアから離れており、自転車ならばともかく車いすでは授業間移動が間に合わない。そこで双方が協議により、授業コマを替え、教室を近い棟に変更することで対応した。ただし体育はどうしても離れた体育館で行なう必要があったため、民間タクシーを定期的に利用して移動することにした。A 君は簡易電動車いすを使用していたこと、短い距離なら自分で移動できることから、セダン型のタクシーを手配することとなった（この条件が満たされない場合はワゴン型の手配を検討する）。タクシーは事前に発着地点を決め、支援学生（ピア・チューター）と授業補助者が介在して授業間移動を支援した。タクシー会社との連絡は障害学生支援室が行ない、学生の授業予定変更などを調整することとした。

④一般の授業については、学類の新歓迎担当の学生や支援学生（ピア・チューター）が時間割を仮組みして A 君とともに問題をチェックした。具体的な支援のあり方については、クラスの学生と話し合うこととした。

(iii) 支援体制の調整

他の障害と同様、運動障害学生の支援についても、周囲の学生が関与する部分と、障害学生支援室に登録する支援学生（ピア・チューター）による支援を組み合わせ構成する。入学後のクラスでは、A 君からのニーズ表明に応じてクラス内で話し合いが行なわれ、筆記具や教科書の出し入れなど困難な場合は近隣学生で対応することとした。また授業中の筆記は、ひとまず自分の筆記とクラスメイトのノートコピーで対

応するが、不十分な場合にはピア・チューターがノートテイクのために入ることを念頭に置くこととした。通常の教室間移動は電動車いすのため介助は必要なかったが、建物へ入る際の重いドアの開閉を誰かにやってもらう必要があった。1～2年の間は同じ授業を取る者も多いので、友人などの介助により対応できることが多い。学年進行につれて個々人の専攻が別れると、状況に応じて支援体制を検討する必要がある。

宿舎からキャンパスはやや離れており、坂もあるため、通学介助についてはピア・チューターが配置された。簡易電動くるまいすなので概ね問題なしとも考えられたが、不安もあったため、当初は介助を入れることとした。ただし夕刻については活動が多様なため、スケジュールを組めないこともあった。

(2) 生活場面の支援

宿舎には台所も付いていたが、基本的には学内あるいは宿舎の共用棟にある食堂を利用した。居室には週2回、ヘルパーの派遣を依頼して、食事作りや部屋内の整理などやってもらうことにした。クラスやサークルで知り合った友人などが不定期に彼の部屋を訪れ、必要な介助を行なうこともある。家族と離れて初めての生活であり、不安も多かったが、ひとまず大学生活を始めた。家族は心配して、当初はかなり頻繁に来ていたが、次第にその間隔が開くようになった。

大学や近郊には民間バスが走っており、定期的にノンステップバスも運行されている。ただ運行便数があまり多くないため、雨天時など利用者が多くなると混雑して利用しにくくなると感じ、通学利用には躊躇した。

誘われて入った文化系サークルでは新入生歓迎会を開いてくれた。自分を消極的な性格と思っていたが、しばらくしてそれなりの空間と人間関係ができることに安堵を覚えた。クラスでは当初検討した支援は継続していたが、同時にもっばら行動を共にする友人が形成されていった。

(3) 物理的バリアとその対応

(i) 連携による改修の推進

筑波大学はキャンパスが大きくまた土地に高低差が多い。また古い建築物も増えてきた。これらの要素は、そのまま物理的なバリアとなっている。

障害学生支援室は施設部との連携を高めるため、支援室の関与する改修要望については、集約と整理の手順を定めている。そこで優先度・緊急性の高いものについて順次要請を行なうようにしている。またまとめられた改修要望を各年度に施設部に提出するとともに協議することにより、円滑で利用者ニーズに基づく改修が行えるよう努めている。

現在は、側溝の破損対応や軽微な段差解消など、簡易な改修については早期に対応してくれることが多い。また改修計画時や工事途中でのチェックについて、障害学生支援室職員や障害学生本人が立ち会いのもとで現場のニーズとズレがないか検討することもあるが、これについて施設部から立ち会いを要請されることも定常化してきている。最近行なわれた例としては、各棟における多機能トイレの設置、スロープの改修、リフトの設置、バス停の段差解消、開閉困難なドアの自動ドア化、エレベータ改修、点字ブロックの設置、教室ドアの引き戸化、などがある。

宿舎の改修は学生生活部局と施設部の関与するところだが、これについても現場確認や具体的な改修提案について協議しながら進めている。

(ii) キャンパスバリアの調査とデータベース化

このように改修体制を整えているが、キャンパスが大きいために知らぬ間に破損や新たなバリアが発生することも多く、改修必要箇所の同定には、継続的・組織的な対処が必要であることがわかってきた。そのため、昨年度より障害学生支援室ではピア・チューターとともにキャンパス内のバリア状況について調査を継続している。1年でキャンパス全域をカバーすることができないため、また継続的なデータ更新が必要なため、エリアをブロックに分けローテーションを設けて複数年で調査を行なうように計画した。調査項目をシート化するとともに評価基準に関するレクチャーを実施した後、各ブロックに分かれて調査を行なった。シート記入に加えて、現場の写真と図示も行なうようにした。これらのデータはファイルに整理し、更新可能な状態に加工している。また結果の一部はWeb上で参照し、いろいろな人から情報を提供してもらえるように作業を進めている。

(4) 学内各部局との連携

その他関連する部局としては、保健管理センター、学生生活課の宿舎担当、教育企画課、就職課などがある。保健管理センターでは、内部機能の障害などについて検診その他の機会を通じて対応する。また運動障害ではないが、精神障害、発達障害、高次脳機能障害などについても互いに連絡を取り合い支援にあたる。宿舎担当では、改修を含めた宿舎の管理を行なうとともに、毎年度の入退去について調整を行なっている。これらについて、障害学生支援室と協議しながら対応している。教育企画課は学生の教育上のニーズに関わるとともに、障害学生支援室の運用に当たる。就職課については、後節で述べる。

(5) 支援体制の変更と課題

(i) 生活の変化とこれに伴う支援体制の変更

運動障害学生については、視覚障害の点訳・朗読や聴覚障害における手話・要約筆記などの恒常的な支援が想定されない場合、年次進行に伴って支援のニーズや体制が変わっていくことがある。それは慣れによるところもあるが、カリキュラムなど学習環境の変化、物理的バリア解消の進行などにも従う。

高校までと異なり、大学では個々人の行動スケジュールが異なるため、支援体制をしっかりと組んだ1年次から始まって、次第に個人で動けるよう準備を進める必要がある。それは家族や同級生と一緒に過ごした高校時代から、大学を経て社会へ出て行くための準備でもある。

A君については、専攻が進むにつれて同じ授業を取る知人も少なくなったため、ピア・チューターによるノートテイクを入れる時間も出てきた。ただし人的配置の限界もあるため、どの授業で利用するかを考えて介助派遣を依頼した。

通学時のピア・チューターは、夏休み以後は依頼していない。慣れてきたこともあるが、時間合わせなどに煩雑さを感じてきたためでもある。タクシーは体育のある学年までは更新しつつ使用していたが、体育を履修しなくなったところで利用を止めた。

また、障害学生支援室では利用し介助される側にいたが、誘われて支援スタッフとしても活動するようになった。通常支援のコーディネーターや、学内のバリア調査とそ

の整理、大学説明会での高校生への対応などに取り組む中で、自分以外の障害学生がどのようなニーズがあり、またそれぞれが異なる背景・条件の中でどのように支援を利用しながら生活をしているかがわかるようになってきた。加えて、学内のバリアについて改修の要請を出す際にも、単に要求を伝えるだけではなかなか応じてもらえない場合があることも学んだ。改修点について問題、改修事項、改善による利益などを明示し、地図や写真などを添付してわかりやすくするとともに、要求事項にメリハリを付けることや、優先順位の検討、年次計画への組み入れ、多経路を通じた申請など、意図を持って継続的に取り組む必要があることを教員や先輩から教えられた。

(ii) 課題

増えてきたニーズとしては、専門分野の学習や研究活動に伴う介助である。図書館の図書・資料閲覧などでは、館内ボランティアに依頼することもあるが、友人やピア・チューターと入って、コピーなどやってもらうことも多い。しかし学外実習や実験については次第に困難になってきたと、A君は感じている。実習・実験は個別に課題が与えられることもあり、隣人に手伝いを依頼しにくくなっている。ピア・チューターを長時間連続で依頼するにも限界があり、体制として不十分であると思わざるを得ない。やむなく、あまり他者に頼らず行なえるテーマを選ぶようになった。また教職課程も取っているため、実習校について担当教員に相談しているところである。

(6) 就職支援

これまでは入学し、学生生活を充実させることに焦点が置かれていたかに思える障害学生支援だが、このところ就職支援についても重要性が指摘されるようになってきている。筑波大学では、キャリア支援室員として障害学生支援室員を加えることにより、互いの連携をはかるようにしている。

就職に関する基礎データの把握は、企業の求人を含めた問い合わせに対応するとともに、学内の就職支援を行なうために必須であるが、これまで障害学生については十分に整理されてこなかった。筑波大学では両者の協力によって障害学生の進路についてもフォローできるようにデータを整えた。また学内の障害学生についても進路希望を収集するとともに、就職関連情報を積極的に配信するようにして、キャリア開発に対する意識を醸成している。また一般学生の就職支援企画への障害学生の参加を促すとともに、障害学生対象の就職支援企画も開催することにより、十分な情報の提供と動機付けをはかっている。近年では、求人活動に来校する企業の一部で、障害学生を特定して意見交換を求める場合もある。このときに自校に在籍する学生の状況を把握し、支援に繋げることができるかどうかは、その後の本人の就職活動に少なからず関わるものと考えている。

昨年の支援企画において、A君はOB・OGから具体的に話を聞く機会を多く設ける必要があると考え、これを企画担当教員に伝えた。その結果、今年度は本学で学んだ先輩をお呼びすることになった。A君はこの企画の準備を手伝いながら、自分の進路について不安な中にも前向きな意識を持つようになってきたことを感じている。